

# 飯田の民俗 (一)

後藤 正二

## 一、概 観

飯田高原・長者原・千町無田などの名称で広く承知されている飯田（ハンダ）は、五万分の一地形図の「森」図幅で、久大線豊後中村駅の南方にあり、県道筋湯―中村線を登った高原にある。高原の東方から南方に掛けては、九州横断道路が走っている。飯田は、玖珠郡九重町大字田能と大字湯坪とからなり、旧飯田村である。昭和二十五年の人口が三千百八十九人、昭和三十五年は三千六百六十六人、昭和四十四年が三千三百三十六人である。湯坪からは西河（ニシゴウ）が北流し、田能では黒河（クロゴウ）と鳴河の小支流が合流して東河となり、西地区の川が一つになって鳴子川となり北流している。旧藩時代は、日田代官所支配の天領であった。滝ノ上の庄屋支配下にあった。飯田の土地には、もとは寺院がなく、九重町の菅原や俊野山、玖珠町山浦などの浄土真宗の門徒である。大字田能の氏神は白鳥神社であり、大字湯坪は山神社の氏子である。

田能と湯坪では、盆踊りなどに違いがみられるとのことであったが、今回（昭和四十五年八月）の調査は、田能のみに限った。民俗資料の宝庫である飯田全域の調査は、今後の課題である。

## 二、社会生活（北方）

### (1) 村の構成・機能

現在の北方（キタガタ）は、宮上（ミヤノウエ）と宮下（ミヤノシタ）とにわかれている。もと飯田（ハンダ）村の大字田

能(タノ)の氏神白鳥神社の本宮(九重町大字田能字中尾一九七四番地に鎮座)によって上下の二地区にわかれる。宮上二十戸は、その大部分が甲斐姓である。宮下二十七戸は、甲斐・時松・清水の各姓が大半を占めている。便宜上、宮下の現当主・屋号・分家などを示すと、つぎの通りである。

- (1) 甲斐ウシヒコ(トコロオノ) 屋号は字からきている。
- (2) 甲斐ショウイチ(ズンドエ)
- (3) 甲斐カジユウ(タカハゼ) (2)から分家三代目。
- (4) 甲斐タカキ(タカハゼ)
- (5) 甲斐ダイハチロウ(タカハゼ)
- (6) 甲斐タテキ 戦後(5)から分家。新分家で屋号なし。
- (7) 甲斐ヒトシ(タカハゼ)
- (8) 甲斐ケイゴ(下本家)
- (9) 甲斐タメトモ(下本家の隠居) (8)から分家一代目。
- (10) 甲斐チヨウゾウ(ムケンハル) (8)から分家一代目。
- (11) 甲斐カツヨシ(イゴンサキ)
- (12) 時松ヒサシ(カミノウシロ)
- (13) 時松フジヒコ(キジヤマ) 字はハチヤシキアト。
- (14) 時松ユキオ(ハチヤシキ) (12)から分家二代目。
- (15) 時松カズマサ(ソズガワ) (12)から分家二代目。
- (16) 時松マンヒコ(カミノウシロ) (12)から分家一代目。

- (17) 時松スエキ (タカハゼ) (13) から分家一代目。
- (18) 清水シマ (コガンヘラ)
- (19) 清水イツヒコ (スズヤマ) (18) から分家三代目。
- (20) 清水ヨシタネ (コガンヘラ) (18) から分家二代目。
- (21) 清水アキラ (コガンヘラ) またはシンブンケ (18) から分家一代目。
- (22) 森エツゾウ (カジャヤ) 父までカジャヤ。二代前にカゴハラより移住。
- (23) 森シンイチ (上の分家) (22) から分家一代目。
- (24) 首藤モモオ (セイマイシヨ) 大正年間に移住してくる。
- (25) 有吉ハルミ (ムケ) もと甲斐姓、養子にゆき、帰って兄のあとをそのまま受けつぐ。
- (26) 塩地チカラ 大工、戦後に来住。
- (27) 江藤ヨシヒロ 戦時中に来住。

旧藩時代の北方は、日田代官所支配の天領であった。滝ノ上の庄屋橋爪氏の支配下にあったが、組頭は解らない。氏神は鎮座の歴史の古い白鳥神社である。お寺はもと飯田地区にはなかったという。北方地区の檀那寺は、いずれも浄土真宗の本願寺派である。玖珠町大字山浦の専徳寺、九重町大字俊野山の芳友寺、九重町大字菅原の浄明寺で地区からは遠く離れた所である。北方地区の一戸あたり平均田畑は一町弱である。多く所有している家は二町余に及ぶ。日田代官塩谷大四郎の文政・天保の時代の努力で、水には恵まれている。山林は、飯田高原の一角で、一戸平均どの位になるか見当がつかぬという恵まれた所である。

〔村の世話〕明治二十年頃までは旧家の本家筋が、村の世話をしていて、組の頭とか呼んでいたという伝えがある。区長とよばれるようになってからは、あまり家筋のことはいわなくなったようだ。それでも、大正年間までは、例えば集会などの時

の座の位置が決っていた。最も旧家が上座に坐り、それに近い親戚が次に坐っていた。山野持ち所のや国有地にヒュトリ（日雇い）に行っている人と、よそからの転入者は同格で、シモンハシ（下座）にすわっていた。出席している人の老若には関係なかった。また、旧藩時代の伝えであるが、年貢を馬で日田まで持って行っていた。その時のみ天領の百姓は、刀を二本差して行ってよかった。そのために、北方の人は、組代表の家に年貢を持ってくる。百姓にも身分の上下があつて、上の方の人は表から家に入ることが出来たが、下の人は裏口から持って入らねばならなかつたという。

〔共有地〕 宮下のみ牧場が約三十町歩ある。北方共有は約二段の杉林と約三段の杉林がある。田能村共有は約十町である。昭和三十一年頃地区ごとくに区画して、杉林になっていっている。三十名共有は約四百町歩ある。人名共有ともいう。北方の人である。一株が三町歩位で、一軒が一株から五株持っているが、十分の一の権利が認められている。それ丈は自由に売買できる。売れば部分登記ができる。持ち分は決っている。

〔組カンジョウ〕 北方は、千町無田に約四町歩の土地を持っている。その田を北方の人に貸してある。そのトクマイが北方の組費の一端になっている。十二月二十五日にカンジョウをして、宮上・宮下一緒に一杯やっている。

## (2) 頼母子講

頼母子は、昭和十二年頃からなくなった。銀行の進出によるものである。土地の金持ち四五人で作った銀行で、森には森和銀行があり、恵良には実用銀行があつて、毎日のように登ってきていた。

頼母子には二種類あつた。個人の名前を取つて「太郎頼母子」とよばれるものと、月頼母子である。前者は、田能地区一人の人に呼びかけて、三十名から三十五名位で、年二回掛けの十五年が多かつた。大きなもので、一回五十円掛けであつた。世話好きの人が呼びかけていた。東飯田・野上・玖珠では講長があつたが、田能では、そのつど協議で決めていた。親は七割の三十五円位、時には八割で、二・三割は利子にまわしていた。親以外は、落札していた。落札人が決まると、抵当を取つていた。頼母子によらず十五円以上の貸借には、必ず抵当を取つていた。大きいものは一号抵当権を、小さいものは二号抵当権を

取り、続いて保証人をたてていた。

月頼母子は、北方から釜ノ口の人三十人程度で二年半、即ち三十口の三十回で掛けていた。小さいもので月一円、大きいもので五円掛けであった。親なし頼母子で、初めから落札していた。乱立ぎみになっていた。要る人は落札する。必要な人の枚数の紙を作って、必要な人のみに配る。要らない人は紙を取らない。紙には総金額が一口何円かのいづれかを書いて折り、盆に入れる。開札の結果、安い人が取る。取り手のない時は、有利な金額を決めて、クジ引きをしていた。落札人が決ると、その席でお金を取りたてる。そして帳面に記帳してゆく。取らぬ人は、終りの方では掛けなくても良いこともあった。

### (3) 共同祭祀

北方の人々の祭祀は、どの範囲の人が祭祀に参加するかということ、つぎのように分類できる。即ち祭祀の社会的基盤である。

- (イ) 大字田能全域の人の祭祀
- (ロ) 北方地区全域の人の祭祀
- (ハ) その他
- (ニ) これを、誰が祭祀集団を形成しているか、即ち祭祀の単位によって分類すると、つぎの通りである。
  - (イ) 大字田能全域の人の祭祀 一件
  - (ロ) 北方地区全域の人の祭祀 四件
  - (ハ) 北方の特定集団による祭祀 五件
  - (ニ) その他

つぎに祭祀の月次は、つぎのとおりである。

お伊勢祭

正月三日

水神祭 正月三日

弘法さん祭 三月二十一日

白鳥神社春祭 五月十一、十一日

祇園祭 旧六月十五日

弘法さん祭 七月二十一日

年の神の祭 旧九月十六日

白鳥神社秋祭 九月十七、九日

稲荷祭 十一月五日

庚申祭 カノエサルの日

個人の屋敷内の祭祀・その他

〔お伊勢祭〕 白鳥神社本宮の御殿の右側に、お伊勢堂がある。北方では、以前は宮上と宮下とが一緒になって、祭典をおこなっていた。今は地域割りに変わり、宮下は二組に分れ、宮上との三つの組で、それぞれ正月三日に祭典をおこなっている。各家より男女二人が米一升を持ち寄っている。各経費は割あてによる。座前は輪番でまわってくる。お神酒をあげて、ご馳走をする。今日では、初めから年始を兼ねておこなっている。

〔水神祭〕 水神さんのお祭は、共有地の神田を分けて財産がなくなるまで、おこなっていた。白鳥神社の上にイゴ（共有地内にあり、清水の湧き出ている所）がある。北方の宮上と宮下とが一緒になって、そこに御幣を納めて、正月三日にお祭をしていた。終ると神主を囲んで白鳥神社で直会をしていた。

〔お弘法さん〕 北方では本家筋にあたる清水二軒、甲斐五軒の七軒がお祭をしている（この家のみがお弘法さんをお祭している）。戦前までは各家で、それぞれお祭をしていたが、戦後は一緒におこなっている。三月二十一日と七月二十一日（今

日は八月二十一日)におこなっている。座前は順番によつてゐる。祭典の日は、それぞれの家より石の地蔵さんをついで座前の家集る。供花も持ちよる。

〔白鳥神社〕 白鳥神社は、近江の白鳥よりうつしたものである。その時、傍に年の神も祭つてあつたので、共にうつしたという。

白鳥神社は、最初は吉部の地にあつた。ある年のこと、肥後から野火がきた。それは彼岸の中日で、わずかに一間巾の帯になつて、地をはつて突進してきた。この野火で社殿のみ焼けたので、社殿は今の年の神に遷され、神殿は白鳥岩に一時とび遷つた。その後になつて今の北方の本社造営にもなつて、神殿と共にここに還つたという。氏子総代は奥郷(楳原・巖原)より一名、笠の口・中村・下畑・萩津留の地区よりは三名、北方より一名、年の神・ヨシブ地区より一名の計六名である。

春祭は五月十と十一日、秋祭は九月十七と十九日である。秋と春祭を北方の本宮でおこなうと、次の秋と春祭は中村の仮宮でおこなっている。仮宮で祭典のある年も、御神体は本宮の方にそのままである。春秋共にミコシが出る。

秋祭には昔から楽と神楽を奉納している。楽打ちは、今日も中村と北方の人でおこなっている。中村より杖十五人・大太鼓は一人・笛二人、北方からは杖二十人・大太鼓一人・笛二人が参加する。杖は二十才以下の人がおこなう。杖の両端には赤白の房をつける。タツツケをはいて、上は絆など自由である。草鞋をはき、白紙の鉢巻をする。大太鼓は子供で、揆には白や赤などの房をつける。服装は杖と同じである。笛は大人の役割である。服装は杖と同じである。楽は十七日と十九日の両日に奉納する。鳥居の所に行くまでがイリハ。社殿につくまでがミチガク。ミチガクが終つて神前でニワガクを一通り打つ。そのあと神前ではハナツエを打つ。神様のお下りの時には、デハを奉納する。

神楽は中日に奉納する。庄内神楽を招いている。十年前までは、庄内の人に習つたという萩津留の神楽が多かつた。春祭は宮総代と子供の祭のようになつてゐるが、以前は神楽を奉納していた。戦後二、三年までは、芝居があつた。由布院の六所権

現の祭典に来ていた芝居を招いていた。本宮の時は北方が、仮宮の時には中村が引き受けて、五日間位はあった。サジキを売ったり、花をもらっておこなっていた。

このような状況であったので、祭の間には市がたつてにぎわっていた。二十軒内外であった。南山田・野上・地元の人、それに玖珠・大分郡からも少しは来ていた。居酒屋も二―三軒できていた。

〔祇園祭〕 旧暦の六月十五日には、北方の上下一緒に祇園祭をおこなっていた。座元はなく、白鳥神社本宮に朝より集って、祭典をしていた。戦時中、人手不足になり、また祇園田の経営も出来なくなって、祭典はなくなった。

〔年の神〕 千町無田の西北隅の一角に、樹木のうっそうと繁っている小さな丘に祠がある。丸太と竹と茅で作ったほったて小屋の祠がある。地面に竹を数本横にならべ、その上に茅をしいて、丸い自然石が数個安置してある。これは、朝日長者の屋敷神であり、守り神であるという。

北方の宮上の甲斐姓十七軒の内十二軒、宮下の甲斐姓十一軒の内四軒でお祭をしている（北方の甲斐姓の内十八戸とも聞いた）。いずれも朝日長者の子孫と自称している。旧暦の九月十六日には、祠の前でダンゴ祭がおこなわれている。神官の代りは、北方の宮上の甲斐アキト宅が代々おこなっている。土地の人々は神官とよんでいる。

年の神の祠は、祭典の日に毎年、昼前までに男が雑木を切つて来て柱をつくり、新茅を切つて来て屋根・側壁を葺き替える。その総指揮には、晴衣姿の神官があたる。古茅は、祠の前に敷くと共に、一丈余の櫛のみられる宮地一段位（内一畝位が平地）の所にばらまく。この木の枝は薪などにしてはいけない。朝日長者の屋敷跡に家を建てると崇りがあるともいう。

女は、朝よりダンゴを作る。米の粉のダンゴに小豆餡を外にまめす。一寸位の大きさである。甲斐アキト宅は、必ず新米でダンゴを作る。昼前、ダンゴを持って、女子供も一家あげてみんなお参りする。

ならべた竹の前には、シノ竹の筒を地面に差し、お神酒をあげる。男子が茅を折りまげて新しく作った三角形の九ツのお碗に、九ツのダンゴをお供える。祭典のあと、神前でダンゴを食べて宴会をする。北方の宮下ウシヒコ宅は、昔から白鳥神



社の世話方で、カギアズカリである。この日、甲斐アキト宅からは、重箱一箱のダンゴがおくられてくるのが慣例になっている。〔甲斐ウシヒコ宅は旧家中の旧家であり、本家筋であり、山野持ちであるが、昔から年の神の祭典には参加していない〕。なお、年の神の近くからは、弥生式土器片が出土しているという。ここが長者屋敷跡ではなかったかといっている人もいる。〔年の神〕 北方の宮下の甲斐ケイゴ宅内には、年の神を祭つてある。年の神の大きな石の祠があり、傍に大木がある。旧暦の九月十七日には、神主を招いて甘酒祭をする。古い親戚筋になる甲斐姓の四々五軒が参加し、祭典をおこなっている。

〔稲荷祭〕 タカハゼ（北方宮下の内）の人八軒でお祭をしている。もと甲斐ダイハチロウ宅が、大正年間に伏見より勧請して、稲荷様を祭り、一軒で祭典をしていた。次第に近くの人が加わってきたので、三畝の稲荷田を寄付した。今日では輪番で、その年の受け持ちの家が田植えをし、収穫は八軒でおこなっている。それを売って一緒に祭典を実施している。秋の取り入れ後の十一月五日である。

〔庚申祭〕 十年位前（昭和三十五年前後か）までは、北方は五々十軒位のグループにわかれて、六十一日目にやってくる庚申の日に、庚申様のお祭をしていた。猿田彦を一カ所祭つてある。

〔屋敷神〕 北方の宮下の旧家甲斐ウシヒコ宅の場合、つぎのとおりである。母屋前方の小高い所の樺の所に、三尺余の石の祠がある。マリイシテン様と呼んでいる。もとは二丈何尺もある縦の大木があったという。家の裏には、自然石を積み重ねてある稲荷様、祠のみになって、中の木像は家の中でお祭りをしているお観音様、自然石のお薬師様が祭つてある。倉の後は、自然石に注連縄をかけた水神様が祭つてある。これらの神仏は、神主さんを招いて年一回まとめて祭典をおこなっているという。

〔神詣り〕 英彦山には、毎年四月に詣つていた。糺種をもらつて来ては配つていた。七月三十一日には、佐賀関の早吸日女神社に、虫除けのお札をうけに詣つていた。金をとりたてて、二人づつ順番に詣り、帰つてお札を配つていた。名前はなく

単に頼母子とよんでいたようだ。いずれも戦前にすたれた。

〔英彦山の豊前坊〕 英彦山の豊前坊からはヤンブシ（山伏）が来ていた。戦前までは、お供をつれてやって来ていた。カドケンベツ（一軒一軒）ではないが、昔の檀家になるのか、毎年法螺貝をふいて、今もカドキトウにまわってくる。家にあがり、神前でお払いをする。威に貼る「三羽ガラス」、一頭に一枚の割合いで牛馬のお札、傷薬を紙に包んだもの一對を、昔からくれていた。お札に米一升をあげる。北方では、甲斐ケイゴ宅に必ず泊っていた。（以前は小田から神主が来ていたが、神主は必ず甲斐ウシヒコ宅に泊っていた）。

#### (4) 相互扶助

〔野焼き〕 牛馬のいる專業農家のみから一人出て、防火線切りを一日、野焼きを一日、三月二十日から四月一日の間にする。あらゆる原野を一緒に焼く。

〔道普請〕 北方の宮上・宮下が一緒になって、年一〜二回、大概是春と秋に、カドより一人出ておこなっている。

〔イゼ〕 飯田より野上へのイゼは、迂回していた上に水量も少なかった（旧イゼの跡あり）。それを日田代官の塩谷大四郎が、文政十一年三月に起工し、天保三年十一月竣工するまで五年余の歳月をかけて改良し、鳴子川の水を引いたものが、今日のイゼである。以前は牟田イゼとよんでいた。北方・鹿伏・猪牟田・桐木で管理している。イゼの世話人は、北方の宮上より三人、宮下より三人があたっているが、その世話人の呼びかけで年一回、苗代田前に、北方口の所は北方でサラエフを出していた。経費の要る時は、野上口の人が負担していた。今日は、北方三分、野上七分の維持費を出している。

〔田植え〕 五〜七軒で組んで田植えをする。田植えが終ると、人数・日数の入れ違いが家によってあるので、田植え休みの時に、決算をする。終って一杯やる。

〔入浴〕 五右衛門風呂が半教位の家にはあった。煙をみては、「風呂かしておくれ」といって、ぬるければ焚いて入っていた。しかし、釜ノ口まで隔日位には、入湯に行っていた（無料）。

(5) 使役・雇傭関係

〔オトコシ・オナゴシ〕 昭和五年頃までは、野上や飯田の地区からオトコシ（下男）やオナゴシ（下女）がきていた。別に子守りをやとっていた。北方の宮下のみで、甲斐・清水・時松姓の内に、オトコシのみを雇っていた家五軒、両方を雇っていた家が一軒あった。オトコシは最後は一日五十銭であった。以前は十五銭で、この期間が長かった。オトコシ十五銭の時、オナゴシは十銭、子守り五銭位であった。オトコシは、オトコシ部屋に寝泊りをしていた。

昼は野良仕事、夜はヨナベに縄ないをしていた。月に三十尋を十箇、したがって一ソクを月平均にして、なわなければならなかった。オトコシが六軒おれば、三々四晩一軒の家に集って縄ないをし、六軒をまわっていた。出来ないと代金から差し引いていたという。大正の末頃からは、オトコシの縄ないはなくなった。

三月五日がヒマトリで、三月九日がイリコミであった。共に親がない時は兄弟が必ずついて来ていた。イリコミと共に、仕事着一着をあたえていた。正月三日間、盆三日間、白鳥神社の春祭二日間、秋祭三日間、三・五・八月の節供に各一日は、仕事を休ませていた。この休みの時は家に帰っても良い。帰らずにいると牛だけは飼わせていた。別に食いぶちを引くことはしなかった。また、休みの時には連れ立って釜ノ口の湯に行つて、帰りに一杯やつて戻っていた。

ヒュトリ 北方の半数位の家は、小作をして生活をしていた。小作人は、地主の所にヒュトリ（日雇い）に行っていた。「何か仕事はないだろうか。」とそして、正月には必ず一升持つていった。

〔その他〕 大分の萩原の人が、五升桶位のものに黒砂糖を入れ、天枰棒で担つて売りに来ていた。反物売りはかついで来ていた。ピンツケも萩原の人であった。鱒の塩物も売りに来ていた。大概是季節をみて来る。代金が払えぬ人は、節季に米や唐蜀黍を馬に何台もひかせて行つて、払つていた。その帰りに、いい家は正月用に塩麴を買つて来ていた。普通の家は、メザシを買つていた。百匹を一レンといつていた。餅米で真白の、中に餡が入つた小国センペイは、一銭五厘で売りに来ていた。

大正の始めまで、地機でおつていた。野上の駅の前にコウヤがあつて、紺や浅黄の糸を買つて来ては木綿織をしていた。昭

和十年頃までは、家で作った股引のみはいていた。メリヤスのズボンを買っていた。反物などは大分で買っていた。

年の神の所に硫黄倉庫があった。午前と午後の二回、ここまで出し、更に川西に出していた。一日仕事であった。千町無田の馬車引きが、硫黄をつんで夜の内に大分に行っていた。大分には夕方になって着く。夜の内に鱈やその他頼まれた物を買ひ込む。大分の大道の馬車引き宿に一泊して、翌朝、早く立って帰って来ていた。

時には歩いて大分に出ていた。大正末期、汽車は小野屋止りであった。大分、小野屋間が汽車で一時間半、歩いた場合が三時間。北方から小野屋までが、歩いて四時間半であった。

この頃の話者は、主に甲斐丑彦(明治三七年)氏である。炎暑にもかかわらず長時間にわたって御教示下さったことに、厚く感謝いたします。

### 三、人生儀礼(田能)

#### (1) 産 育

〔帯祝い〕 帯祝いは、五カ月目の戌の日におこなう。身近な親戚をよんで酒盛りをする。お祝いのシルシに、ワキの人は白木綿十尺位(二、三巻き分)を持つてくる。仲立人もよばれて、シルシを持つてくる。これが仲立人との手切れである。帯祝いは、長男の時はおこなっていたが、あとはしなかった。

〔安産祈願〕 安産の祈願には、森のアンラク寺に詣っていた。一部は大分の高城さんに、あるいは檀那寺に詣っていた。お寺の門には入って、最初に女子にあえば女兒が、男にあえば男児が生まれるという。お札を受けて帰り、産気付いてから飲ませる。

〔出産〕 納戸の畳をあげて、藁を敷き、その上に莫座を敷いて産む。布団を三ツにおるか、トリアゲババが前にいて、出

産していた。大正七、八年頃から一部には産婆が来ていた。出産後は、疊の下にモーガを置いて、斜にし、その上で産婦は休んでいた。

へその緒は、足半を下に置いて竹のコベラで切っていた。足半は使いふるしたものであった。後産は藁スボに入れて使所道にかけた。藁スボに入れると良く溶ける。それを父親が最初に踏まないといけないという。また、その上を通った動物を恐ろしがるという。家によっては、納戸の下に置いていた。

〔産飯〕 産飯は、御飯茶碗に盛って、その上に丸いこい石をのせるか、お膳のかたわらに置いていた。産飯には、箸を両端に立て穴をあけると、笑窪ができるという。

〔名づけ〕 三日目を「名付け」というが、「七夜」で名付けをしていた。親類を呼んで料理をする。名前は親が決めたが、みんなで相談してつけていた。一杯だした席で、最初に産婆に抱かせてから、みんなで抱きまわしていた。

〔宮詣り〕 男は三十一日目、女は三十三日目に白鳥さんに詣る。母の里からは、宮詣りギモンをもらい、それを子供にひっかけて、母が抱いて詣っていた。詣った時、子供を泣かせて、その泣声を聞いてもらわねばという。帰ってくると、赤飯で一杯飲んでいた。

〔初正月〕 男は破魔弓、女は羽子板を里より持ってくるのは、終戦後の傾向である。以前は、野上くんだりからは持ってきていたが、田能にはなかった。

〔初節供〕 三月は雛祝い、五月は幟。三月には、雛人形・餅・桃酒を母親の里より持ってくる。お神酒には、桃の枝を差してくる。家では、燗瓶に、桃の花の蕾を入れてお供えする。そして菱餅に、あんこ入り・白餅・桃の枝を添えて配る。菱餅の屑はアラレに切る。カキモチは砂糖を入れたものを一寸巾に切って置いて、お客などの来た時にお茶受けに出していた。

五月には粽の団子に鎧武者の人形、お神酒には菖蒲を差して母親の里から持ってくる。お客はしない。内輪でお祝いをする。サンケラまたはヨシの団子を親戚に配る。あんこ入りである。ヨシの団子が多かった。中に団子を入れて、ヨシで包み、上を

ねじて菅でくくる。今は棕櫚の葉をさいてくくっている。それを五つずつ片へらにして、葉が裏になるものを五つ左に、表になるものを五つ右にして、上を大きく下を小さく扇にして、モト(下)の方をくびる。それをセイロでうむす。夜の内にまいて置き、朝、セイロでむす。それを祝いを持ってきた所に十箇一くびりにして、柏餅、フツと菖蒲を添えて配る。

〔初誕生〕 初誕生は簡単にしていた。餅をついて親類に配っていた。お祝いに餅は付き物である。その日、一升餅をかつかせて子供を歩かせていた。歩く者は少なかつた。

(2) 年令通過

〔紐とき〕 三才の十一月十五日に「紐とき祝い」をしていた。母の里からは着物や帯を持ってくる。着物の内容・点数などは里次第である。簡単な祝いをしてきた。お客をする前に白鳥さんにお詣りをしてきた。

〔厄祝い〕 男四十二才、女三十三才を大厄という。男は「四十二の祝い」といって、親類・近所の人を呼び、大きく祝いをする。祝いをしないとマクル(負ける)という。来客は「お樽料」を包んで来る。しかし、女の三十三の祝いはしない(湯坪方面は祝いをする)。

〔還暦〕 六十一の還暦の祝いは、家の財政によっておこなう。招待された人は、樽料・米一升・野菜(午莠か作り芋)を持ってくる。女の祝いはない。

(3) 婚姻

〔婚姻圈〕 田能地区内での結婚が大部分であった。その他の地区では、小国・玖珠・野上・庄内・直入などであった。これらは親戚筋か、仲立人の血筋先、有力者の血筋先の者であり、田能地区内も含めて血縁結婚が最も多かつた。

〔縁談〕 大部分は親が決めていた。仲立人を双方たてる。あらかし交渉をして置いてから、結納をかわしていた。この時に、ヒニチギワメもしていた。

〔お別れ〕 嫁にゆく日に、「前座」でお別れをしていた。大きくする時は、他人は前の日に呼んでお客をしていた。

〔荷取り〕 嫁迎えにゆく時には、柳樽にノシ紙、水引をつけて、馬にウせて持つて行っていた。それと一緒に人足が荷取りに行く。タンスは必ずもたせて嫁にやるが、長持を持つて行く家は良い方の家であった。

〔嫁迎え〕 嫁は仏壇にむかつてお参りしてから、両親に「お世話になりました」と挨拶をしてから出立する。遠い嫁入り先の時は、嫁を馬にのせていた。ノリシタといって、ツズラの黒いカゴにジュウタンをしいて、その上に乗せていた。ノリシタには、嫁の物を一緒に乗せていた。婿の方では迎え火で、カドまで迎えに出ていた。婿方につくと、嫁は直ぐ婿の家の奥納戸、または別の部屋に入る。ヨメマガイがあれこれと世話をし、道着物を着替える。お茶を飲む。

〔夫婦盃〕 みんなの寄っている座敷で盃をする。顔に墨などをぬって、滑稽な風をした嫁見の人が、兩戸縁より家の中にあわせて式三番をうたう。その人には酒の二、三升をやる。式三番の最初の歌で最初の盃をかわす。次の歌で次の盃とおこない、終つて嫁は綿帽子をとる。続いて親子の盃、兄弟の盃がおこなわれる。その中とりもちを仲立人がする。

〔披露〕 二の膳でオテツキの餅が出る。続いて本膳が出る。吸い物の数は家によって違い、決っていない。会席膳には、蛤吸物にトリザカナの皿を添えて出す。その時婿の親が吸い物が変わったのでお取り下さいと挨拶をする。宴が進むと、嫁方の女の人が唄いはじめる。

蝶よ花よと育てた娘

こよいこちらに連れ越すほどにや

末はよろしく頼みます。ヨイヨイヤナ。

これを受けて、婿方の女の人が、

稀なお客に何があなご馳走

師走菟冬なる茄子

天の川原の鯉と鮒。ヨイヤナ。

やがて、嫁御賞めの唄を女の人が歌う。

一つ、一つ間に来てみれば

両親様のお喜び

三つ、見事にできました

四つ、嫁さんのごきりょう

牡丹、芍薬・百合の花

七つ、なにか

八つ、やわからかに当りゃんせ

九つ、ここまできたものを

とかく、ごえんとおもわんせ。ヨイヤナ

歌い飲んでいると、やがてオタルピラキがおこなわれる。嫁が酒をついでまわる。両側からも唐津焼の三ツ組の盃でまわす。帰る前には、ヨメゴジャを出す。嫁にお茶をくませる。母がくんで、だれそれに持って行きなさいと差図をする。順番がある。苦情をいう者、受けとらぬ者が出る。それを仲立人がとりもつ。いよいよお客の帰る時には、メシクイジャワンで、「草鞋酒」を飲ませていた。

式が終ると姑が連れて、ヨメゴマワリをする。「若い者をもろうたので、よろしく」と挨拶をしてまわる。物を持って行くのは近頃のことである。ヨメゴマワリの後、村の女をよんで、ミシリアイをする。家によってはしない所もある。これも家によるが、青年団全部を招いて披露するオタルピラキなどがある。

(註) 前記の祝いの唄には、別の記録がみられる。加藤数功・立石敏雄編「九重風物志」(筑紫山岳会刊・昭和二十八年五月一日)には、販田の民俗について数多くの資料が集められているが、その中に販田のヨイヤナ節として、つぎのものがみられ



る。

蝶よ花よと育てた娘

今宵あなたにあげます程に  
末はよろしく頼みます。

蝶よ花よと育てた娘

今宵はこちらに下さる程に  
さぞや御あとは淋しかろ。

貰い受けたる花嫁様は

疎略にやしませぬ大事にします  
氣遣ひなさるな親御様。

あなた御出を此の頃からは

日に待ち毎日指折りかぞへ  
今日という日を待ち受けた。

あの子両親ふところそだち

西も東も分からぬ故に

万事よろしく頼みます。

一に親様 二にあに弟  
三に世話するなただち様よ  
仲のよいに頼みます。

鳥も古巣に二度帰りやせぬ

二度と帰るな我がふるさとへ  
夫を頼りに居らしゃんせ。

わしが連れたるあの家の娘

まだも若木でものなれませぬ

万事よろしく頼みます。

〔ミツメあるき〕 婿・婿の両親が揃って行く。酒一升・餅一組をエジユウに入れて行く。嫁方と婿方の仲立人にも餅一重を持って行く。

〔初正月〕 ヨメカガミ二重ねと酒一升を持って行く。いい家は罎一匹をそえる。ヨメカガミは下段が一斗三升位、上段が七升位であり、下段は直径二尺以上、上段は一尺半余で、共に厚さ二十糎位の大きなものである。これを四角に切つてノシをかけ、凧に入れて、牛にウせて行く。このヨメカガミは、半分は婿の家に返す。双方共に切つて親類などに配る。また、初正月には両方の仲立人も招く。婿方は、仲立人に酒一升をあげる。そのために、仲立人は後になって若夫婦をよんでいた。

#### (4) 葬 送

〔告げ人〕 講中の人が家を順々にふれて行く。よその土地には二人でゆく。一人でゆくとマケるといふ。お寺には米一升を持って二人で案内にゆく。道具をもって帰る。返しには家の人がゆく。

〔お通夜〕 お通夜は一晚であるが、友引になる時のみ二晩する。北方の場合は、北方の下が二つにわかれて「講中」が出来るが、お通夜には北方全部の人がくる。米四合を持って来る。四合枿があつて、多い場合は返す。オニギリに野菜の煮た物をつけて夕食を出す。夕食の後しばらくして講中の人以外は帰る。講中は十二時頃になる。酒を出す。

〔講中〕 講中の人は死んだことをふれてまわり、お寺に案内する他に、順番で二人ずつアナホリをする。アナホリの人には、酒五合とオニツケがつく。また、野辺の道具の中で、灯籠二・ローソク立て二・六道六・線香立て二・花輪一对を作る。別に花輪一对は死人の出た家の人が作る。別火になるので講中の人々が煮炊きをする。

〔湯灌〕 死ぬと北枕にして、表と寝間の境に寝せてあるのを、朝暗い内に親戚で「湯灌」をする。畳と床板をあげる。竹を二つに割った物をあんで作ったサンを置いて、その上で洗う。タライに湯を入れ、近い人が逆柄杓で掛けて、ふいて行く。残った湯は床の下にすてる。

〔納棺〕 棺桶は四角の立棺であつた。三角布・白無垢・白足袋をつけ、珠致を手にかける。藁を四ツ折りにして紙を巻き、動かないように間に詰める。その藁は、折る人は折るだけ、紙を巻く人は巻くだけ、詰める人は詰めて行くだけである。いずれも近い人がおこなう。納棺が終ると座敷に出し、蓋の上には鉞や剃刀などの金物を置く。

〔葬式〕 友引の葬式はさける。友引にあたると翌日に延期する。

〔出棺〕 座敷から棺を出す時は、死人が後向きになるように出す。その時、茅で作った松明一本に火をつける。あまり燃えないようにする。棺桶が軒の下を通る時に「ご願ホドキ」に米をまく。そして外に出てから棺桶を本方向にもどす。近い人が担ぎ出して後は講中の人が担いで行く。ロウソクは岐れ道に一本ずつ立てて行く。それを最後尾の人が抜いて行く。道の遠

い所の人は足りなくなるので、抜いたものを先頭に持って行く。

〔埋葬〕 講中の人が西向きに入れる。その上に近い人がフンバタカッて、四隅より土を入れる。後は講中の人が土入れをする。親族は少しづつ投げ込む程度である。盛土の上に藁をサカシ(逆)にして、松明を四ツに分けて、四方より火をつける。墓から帰ると、酒三升・ウドン十把位を持って講中の人にお礼に行く。夕食は講中の人が持って来る。夕食の後でお経があり、家の人々にお説教がある。お寺さんは泊る。

〔朝法事〕 翌朝、お経をあげて親戚・講中代表一名に酒を出す。

〔礼参参り〕 レイサンマイリは、お寺さんとの相談で日を決める。お寺が遠いので、一々二人でお参りする。寺の荷物・米・酒(またはお金)を持って行く。遠くて、お寺参りの出来ない人は、家からレイサンマイリをしていた。

〔四十九日〕 四十九日までは七日毎にお寺さんがくる。四十九日は、講中の人が各戸より一名と親戚の人がお参りして行く。四十九の餅をホコウ。参った人に分けてあげる。

〔法事〕 四十九日の後は、百カ日・一周忌・三・七・十七・二十三・三十三・五十年忌の法事をする。一周忌は、親戚の人と講中の人が各家より一名お参りする。十七・二十三・三十三年忌は人によって違う。

この項の話者は、時松ランイチ(明治二八年)、竹田シズカ(明治三十年)、矢方ミチエ(明治三十二年)、甲斐タツオ(明治二七年)、時松豊彦(明治三二年)、甲斐ウシヒユ(明治三十七年)の諸氏である。炎暑にもかかわらず長時間にわたって御教示下さったことに、厚く感謝いたします。